

鳥羽市議会改革推進特別委員会会議録

令和4年5月23日

○出席委員（12名）

委員長 坂倉 広子
委員 南川 則之
委員 瀬崎 伸一
委員 奥村 敦
委員 中世古 泉
委員 浜口 一利
委員 世古 安秀

議長 木下 順一

副委員長 山本 哲也
委員 濱口 正久
委員 片岡 直博
委員 河村 孝
委員 戸上 健
委員 坂倉 紀男

○欠席委員（なし）

○職務のために出席した事務局職員

事務局長 岩井 太

次長兼
議事総務係長 平山 智博

(午後 1時22分 再会)

○坂倉広子委員長 皆様、こんにちは。

ただいまから議会改革推進特別委員会を開催いたします。

これより議事に入ります。

本日ご協議いただく案件は、事項書のとおりです。

それでは、協議事項1、議員定数についてを議題といたします。

前回の協議では、各委員の考え方を発表していただき、今後の議論すべき事項として、それぞれテーマを絞って検討していただくこととしました。本日は、前回ご提案いただいた人口減少、他市町との比較、市民アンケート、議会力の4つをテーマとして議論を深めたいと思います。定数を決定するに当たり、それぞれのテーマにおいて議論することで、議会としての答えが出てくると思います。

それではまず、人口減少をテーマに議論を進めたいと思います。よろしく願いいたします。

いかがでしょうか。

まず、人口減少についてを深めたいと思います。恐れ入ります、戸上委員、いかがでしょうか、すみません。人口減少。

○戸上 健委員 私の意見を申し述べます。人口減少と議会定数との関連で考えるべき幾つか、4点ばかり発言したいと思います。

もちろん、人口減少も議員定数を考える上での一つの要素だというふうには思いますけれども、地方自治法が定めた議員定数と人口区分、これを見てみますと、市と町村では違いますけれども、市の場合、人口が90万以上から5万人未満まで7段階に決められております。鳥羽市は人口5万未満ということになりますので、定数の上限は26人です。町村の場合は、人口は2万人以上から2,000人未満まで5段階に定められております。2万人以上は上限26人、1万から2万、これ鳥羽が今該当するところですが、22人上限です。話題になっておりました尾鷲市の10人、熊野市の12人ですが、これは人口、町村で2,000人未満の自治体ということになっております。

ですから、鳥羽市の今定数14人上限というのは、町村段階での人口2,000人から5,000人未満、ここに該当します。ですから、地方自治法が定めた人口規模と議員定数の度合いから見れば、鳥羽市は人口5,000人未満の町に等しいと言えます。ここが判断の一つではないかというふうに思います。

それから、鳥羽市の人口、これまでの推移と議員定数について、僕も前のときに考え方について言いましたけれども、人口減少に比例して減らすべきというのであれば、市職員数や執行部の管理職数、こことも照らし合わせる必要があるのではないかというふうに思います。行政職の職員数は平成23年度325人で、令和2年度、直近の調査308人、もう少し少なくなっておりますけれども、ですから減らしたのは5.2%減です。職員数に比例させれば、議員数14人のうちの5.2%ですから0.7人ということで、1人未満ということになります。

僕は、むしろ職員数よりも、職員数は減らし過ぎたというのも議会の委員会で議論になったところです。管理職数と僕は対比すべきではないかというふうに思います。執行部席は24人、これは本会議場での24人、

これはここ20年変わりません。議員数だけがどんどん、19人、16人、14人と減ってきております。これでいいのかということが言われると思います。

それから、人口減少というのは、議会の責任ではなくて執行部の責任です。全国の自治体では、人口減少を食い止めて、人口維持もしくは増に転化しとる自治体もあります。議会としては、私調べていましたら、この10年間だけで、一般質問の項目で人口減少に関わって質問なされた議員、これは全部で181件ヒットしております。答弁を含めずにですよ、質問の項目だけで。ということは、それだけ我々議会は、この人口減少をいかにするかということで、非常に関心を高めて議論をしてきたということが言えるというふうに思います。

そうした中で、これからますます鳥羽は、もう衰退する一方じゃないかと、人口減少して何もかもあかんのやないかという声も市民の中にあります。議会の出番だというふうに私は思います。議員の総量を減らせば、執行部に対する議会力というのは確実に低下するわけで、市民のためにならんというふうに思います。

それから、人口減少というその頭数だけで問題にするよりも、私は財政規模と対比すべきじゃないかというふうに思うんです。人口減少がどんどん進んで、この間鳥羽市は、この10年間でも4,000人以上減りました。1年間で400人減っていくわけですから。それに対して、決算の歳入額というのは、20年前の平成14年度の歳入総額121億円。最新の決算、令和2年度決算の歳入額は154億円です。今年、令和2年度はコロナがあつて、ちょっと財政規模が膨らみました、国からの交付金で。一昨年と、令和元年度と対比してみますと、令和元年度は121億円で、歳入総額、20年前と同じなんです。

ですから私は、人口がどんどん減っているから、議員数も減らすべきやないかというのではなくて、それちょっと僕は短絡的だというふうに思います。この財政規模を本当は見て、財政規模もどんどん縮小しとると、少なくなっているということになれば、私は管理職も減らす、議員も減らす、職員数も減らすと、それは妥当性があるというふうに思いますけれども、現状の財政規模から言うと、全く問題視するに当たらないと思います。

以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

ほかにございませんか。

(「すみません、ちょっと」の声あり)

○坂倉広子委員長 はい。

○岩井事務局長 戸上委員の1つ目の議員の上限のお話が出ていたと思うんですけども、ちょっと私、資料をちょっと持ち合わせていませんが、数年前に議員の上限は地方自治法上廃止されています。今の場合、各市町の条例に議員定数を記載しろという形になっていますので、今はその人口規模で何人というのは地方自治法上ではございませんので、すみませんが、その辺だけちょっと訂正というか、確認をお願いいたします。

○坂倉広子委員長 戸上委員。

○戸上 健委員 分かりました。僕も未確認でしたので、前の総務省の資料からこれを引用しました。一応以前はこういう考え方をしとったということで、参考にさせていただければというふうに思います。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

ほかにございませんでしょうか。

浜口一利委員。

○**浜口一利委員** 前にも言わせてもらったんですけども、3年前も現状維持ということで強く言っとったという流れがあったんで、私はあったんですけども、その後やっぱり人口減少が進む中で、やっぱり人口減に伴って定数を少なくせなあかかなという思いはあったところなんですけれども、果たしてそんな考えでいいのかどうかと、本当に考えればそう思います。

人口減が進めば、当然のように議員の役割というのは大きくなると思うし、また鳥羽市については、地域、離島とかって、結構分散しているという流れの中で、人口減に伴って少なくしていけばええというような市民アンケートは多いわけやけれども、果たしてほんなら2040年、鳥羽市の人口は1万人になると予測されるけれどもさ、ほんなら今の半分にしていいいんかという話。あまりそれに、人口減に伴って定数を少なくしなければならぬというような考え方というのは、どこかでしっかりとけじめと言うんですか、我々が議会を維持していくためにはどのくらいの議員の定数が必要かというところを、徹底的にやっぱり協議した中で決めなければならぬと思います。

このような市民のアンケートの中では、どこの市町でも、鳥羽市以外でもそうなんですけれども、こんなアンケートをすると、議員は多過ぎる、人口減が進んだら定数も少なくしなければいけないという、その市民の答えというのはどこにでもある現象なんですけれども、果たしてこのような流れの中で、どんどん定数少なくなってしまうば、私はちょっと考えなければならぬと思います。

私も議員を志すということではなかったんですけども、どうしてもやらなければならない状況の中で、一生懸命やってきた中で、人口減に伴って議員を減らせ減らせていうことでは、ちょっと待てよと言わざるを得ないという、ただ、そのようなことです。

○**坂倉広子委員長** ありがとうございます。

ほかに。

山本副委員長。

○**山本哲也委員** ありがとうございます。

戸上さんの根拠というか、人口減は単の理由にするべきじゃなくて、地方自治法のあれを持って来られて、その話もそうですし、それと比較して財政規模的にも、人口は減り続けるとけれども変わってきていないよというところの部分においては、単純に人口が減っているから議員の定数を削減するというのもちょっと違うんじゃないかというところは、すごく分かりやすかったなというふうに思います。

私もちょっと、人口減少は加味してというところは書かせてもらったんですけども、とは言えども、やっぱり減っていく中で、いつまでたっても、じゃ同じというわけにもなかなかいかんのかなという中で、今回その辺も見越して、いかに少ない人数で十分な議会としての機能を保てるかというところを考えていく必要があるんじゃないかというところもあって、削減にさせてもらいました。

僕ちょっと聞きたいなと思う人がおりますんで、例えば片岡さん、すみませんけれども、前は定数現状維持で出されたじゃないですか。今回、第一に人口減少が進んどるということで削減というふうに書いてもらっているんですけども、その辺のお考えが変わってきた中で、人口減少を一番に捉えられるとか、その辺の部分ってどういう感じで今回、あれなんですかね。そのところを理由にされるとかというのを、ちょっと聞か

せてもらいたいなというふうに思うんですけども。

○坂倉広子委員長 よろしくお願ひします。

片岡委員、どうぞ。

○片岡直博委員 これといった根拠があつてというわけじゃないんですけども、基本的に僕が考えるのに、今後その人口が増える見込みがない。どういうペースで減っていくかいうんが定かではないんですけども、マイナスで行かざるを得んんじゃないかなと。根拠があつてというわけじゃなくて、人口減が進む中で、現状維持ではいかなものかなと、そういった感じでマイナスにというふうにさせていただきました。

以上です。

○坂倉広子委員長 山本副委員長。

○山本哲也委員 その人口減というのは、前回のときもずっと、人口減の話はずっとされとるわけじゃないですか。でも、前回は現状維持で出されとって、今回理由が、人口が減っているからというふうに考えが変わられとるわけですよ。その辺のどういうところ、例えばこの間資料として出させてもらいましたけれども、議員1人当たり、どんだけの声を預かる分が、さすがにこれやったらというところで判断されたのか、減少のところはこれ以上、どう言っていんか分らないですけども、どういうところでその考えが変わられたんかなというのは、個人的にちょっとしっかり聞いてみたいなと思つておまして。

ほかに、前回維持のほうから、人口減少を理由に、例えば中世古さんもそうなんですけれども、人口減少を理由に今回出されとるんですけども、人口減少というのは、この今期というか、このメンバーになってから始まったことじゃなくて、ずっと減少されてきてとるわけですよ。そんな中で、前回は、いやいや現状維持でいいんじゃないかと言ひながら、今回は人口が減っているから減らしたほうがいいというのは、どの辺でその辺のスイッチが変わつたというか、考え方が変わったのかなというところで聞かせてもらいたいなと思つたんですけども、その雰囲気的なものでそうやっておっしゃっているのか、市民の声がやっぱりさすがに増えてきたというところなんか、どの辺なんかなというところを聞かせてほしいなと思ふんですけども。あれば、特にないですか。

(「市民アンケートかな」の声あり)

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

(「いいですか」の声あり)

○坂倉広子委員長 山本副委員長。

○山本哲也委員 中世古さんはどうですか。考え変わられていますけれども、前回から。4年前ですか、29年のときも、それは現状維持で、今回減少を理由に出されていますけれども、何かその変わったきっかけというか、何かその辺って何かありますか。

○中世古 泉委員 これだけ減少が進んだ中で、ちょっと経済的にも活気がないというのが見受けられるものから、そういう方向に流れていくのが自然なのかなということで、厳密に何名削減しろとか、どうせよという感覚はないんですけども、基本的にはそういう方向に行かざるを得んのかなというふうに、現状からは考察する次第です。

以上です。

○坂倉広子委員長 山本副委員長。

○山本哲也委員 ありがとうございます。

なるほど。理由として、戸上委員がしっかり論立ててもらったところがあったんで、何かこう、それを受けて人口減少を理由に出しとるところで、何かこうしっかりした理由があったらなと思いながら聞かせてもらったんですけども。ありがとうございます。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

ほかにございませんでしょうか。

戸上委員。

○戸上 健委員 委員長、ちょっと僕ばかりしゃべつとるようで申し訳ないんですけども、ちょっと議員間討論を活発にする上で、ちょっとあえて言いたいんですけども、4年前も8年前も同じです。人口減少というのは、大体毎年400人ずつ減っていくというので変わっておりません。その都度、議会としては、これはもう重大問題だという議論をしてきました。

僕はよく覚えておりますけれども、以前の木田市長のときに、山本副委員長が移住定住問題で質問をされて、そのときに木田前市長は「移住定住元年に今年度からしていく」と。もう5年前です、それ。それで今、中村市長に代わられたんですけども、執行部も、このこういう人口減少というのは何とかせなあかんという意欲にあふれとったと思うんですよ。ですから、そのときに移住定住の予算は4,706万円でしたかね、計上しました。ところが、直近では1,700万ぐらいに減つとるわけなんです。

もう本当にどんどん減ってきて、その都度我々議会としては、さっき181件という、この10年間で人口減少問題に関わる質問項目のヒット数を挙げましたけれども、本当に議会としては真剣に、先ほど中世古委員は自然現象だというふうに言いましたけれども、自然現象ではないんですよ。実際に増やしとる市町もあるわけだから。ですから、政治の総意でどんどん減るか、それとも何とかして食い止めるか、それとも……するかというところなんやと僕は思うんです。

ですから、アンケートでも市民が、人口減少で鳥羽が本当にどうなっていくかということで心配し切つとるのがあふれとるわけですから、それに対して議会は議員数減らして、そしてわずか414万円ですよ、1人減らして。ほんだけをほかに回しますというようなことで、僕は責任転嫁できないというふうに思います。あくまでも議員力を高めて、もうあまりそういう発言もしない議員であれば、有権者に変えてもらったらいいわけですから。またこういう議員を選びたいという議員に変えてもらったらいいわけですから、僕も、戸上健も、もう戸上健、あんたはええと、ほかに代われというんだら、すぐにでも私は変わります。執着しません。

ですから、そういう、1期目、2期目の今の議員の皆さんは、本当に僕はやる気があると。前回の意見でも書きましたけれども、こういう議会こそ僕は有権者が求めとるというふうに思うんですよ。ですから、本当に有権者の真意はどこにあるのかと。人口減少が進むから、進んでいるから、止まらないから、議員数も削減したほうがいいという真意はどこにあるのかということ、やっぱり議員間討論でもっと僕は深めたほうがいいんじゃないかというふうに思うんです。単純に人口減つとるから、議員の皆様、頭数減らしてくださいということ求めてござるのか、どうなのかというところで僕はあるというふうに思うんです。どう思われる。

○坂倉広子委員長 河村副議長。

○河村 孝委員 もともと私は、前回この定数削減の議論をしたとき、現状維持だという主張をしてきました。何で今回苦肉の策で1名減というふうにしたか、また10年で2名減というふうにしたか。もう本当に、戸上さんと一利委員のおっしゃるとおりだと思います。できることなら、議員定数というのは減らしてはならぬ、議会力を下げてはならぬというのが、今でも私の基本的な考え方です。

戸上さんがおっしゃっていただいた、その人口減少との関係についてなんですけれども、自分なりに調べてみたんですけれども、人口減少イコール議員定数削減では、私はそういう考え方ではなくて、人口減少による、これは企画財政が推計している10年後の話なんですけれども、人口減少に伴って市の歳入規模の縮小が起ると。これは少子高齢化の進展に伴って、担税力の高い生産年齢人口の減少が起るであろうというふうに推計されているわけです。それによって、市税が今後10年において、市税の歳入が1割以上減少するというふうに推計されているわけですね。人口減少自体が議員定数に結びつくというよりも、さっき戸上さんがおっしゃったように財政規模との比較をするべきだと、もう私もまさしくそのように思います。

その中で、今後10年、今の今日の現時点でのお話をしたら、もう全く戸上委員のおっしゃるとおりだと思うんですけれども、今後10年をベースに考えて、特に我々の世代というのは、10年後、20年後を見据えて、我々がやっぱりその辺は結論を下していかなければならない世代だと思うんですね、40代、50代が。そう考えたときに、人口が、戸上さんおっしゃったように毎年300から400ぐらい減って行って、このまま行くと市税の歳入も減ってしまう。そこをなるべく減らさないように努力するのは執行部の責任だ、これももう当然だと思います。しかし、それをやってもなかなか、じゃそれが増加に転じられるかという、日本全国で人口減少が起きて地方の財政が苦しくなっている。これはもう、まさしく依存財源のほうが増えてしまっているわけですね。自主財源が目減りしていくというところが、人口減少に関連して財政がより硬直化してくるというところが、今後10年で考えられるというところが、まさしくその議会に直結してくるのではないのかなというふうに、私の問題意識です。

なので、基本的に議会力を下げてはならないということと、今後の10年を考えた財政規模、流れ、そういったところでの判断で、泣く泣く1減、10年で2減という方向は仕方ないのではないのかなというのが、私の最終的な判断でありました。

事務局に調べてもらって、北海道から九州までいろいろと2年度の一般会計の財政規模がよく似たところを抽出して、一般会計における、うち議会費のパーセンテージというのを調べてもらったんですけれども、一番上が1.5%という町があります。一番低いところで0.6%、一般会計における議会費がというところが、よく似た財政規模、よく似た人口のところで、ある程度、幾つぐらいだろう、これ、40ぐらいかな、抽出してもらったんですけれども、そんなデータがあります。

鳥羽の場合は、当然令和2年度の一般会計のところで決算ベースでやっているんで、戸上さんおっしゃったようにコロナ関連の給付金等々のお金が増えていまして、財政規模は1割か2割膨らんでいますけれども、決算ベースの数字では。それでも鳥羽は、その中間の0.9%ぐらいですね、議会費というところは。だから、今のこの現時点では、戸上さんおっしゃっているように、財政規模的にもうちが、14人が決して多いというものではないというところは表していると思うんですけれども、この後、じゃどうするんだと。

当然来年の選挙を迎えて、その決まった議員の方々がその4年を、次の4年を背負うわけですね。そうす

ると、我々はその5年、来年への1年も含めて5年というところを、まず一くくりで考えなければならない。さらに、その議員さん、選ばれる議員さんが、その次の4年を決めるわけですよね。そう考えると、トータルやっぱり議員を減らすというところは、10年先まで見据えて物事を考えるべきではないのかなというふうに思っていて、泣く泣く1減というのが私の考え方でありました。あとはもう、皆さんに議論していただければいいかなと思います。

以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

山本副委員長。

○山本哲也委員 前回キーワードを出してくださいということで、世古委員のほうから財政状況とかというところを出してもらったと思うんですけども、すみません、正副でちょっと話をしまして、この人口減少と財政状況がリンクするんじゃないかというところで、もう一緒にここに含めさせてもらおうということで、財政状況もこの人口減少と併せて話をさせてもらおうという話で、事前に説明することを忘れていまして、結果リンクした話にはなっているんで、あれなんですけれども、その辺も含めて皆さんの意見を出していただければというふうに思います。すみません。

(「了解です。どうしてもリンクしてくるね」の声あり)

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

瀬崎委員。

○瀬崎伸一委員 すみません。私の立場は1名から2名の減という立場ですけれども、大前提として、今現状は現状維持ということ、議会として、議員として主張できない状況にあるという前提があって、もしこちらに正論があったとしても、こちらが理路整然とした理由を持ったとしても、今現状のこの置かれている状況からいって、コロナ等々もあった中で考えれば、市民に対して現状維持したいんだという主張を我々はするべきじゃないんじゃないかという、先ほど河村委員がおっしゃった苦肉の策、本当にそこに至って、減少を、定数減をしなくちゃいけないというのが私の基本スタンスで、今回書いたつもりです。

私も私なりに、この人口減少というものを削減理由とするメリットというか、支持できる方向性はどっちなのか、不支持な方向性はどこかなというのを、できるだけ分かりやすく自分の中で頭を整理する意味で考えてきたんですけども、市民の方から見て、市民1人当たりの負担ということ、我々を議員としてここに存在させる費用を市民が負担しているという考え方をすれば、人口が減れば減るほど1人当たりの負担は増える。それはそういうふうになっていくんだろうと思うので、何となく市民の方々は、人口減少と我々の定数減をリンクさせた発言をされるのかなというところが、恐らく市民が言う理由なんだろうなと私は考えました。

ですけれども、私の中で、今回この人口減少という問題が議員定数削減には、実は自分の中ではつながっていません。単純に行政のこの機構の中で名簿を見せてもらったりすると、いわゆる課数、企画財政課とか総務課とかという課数だけ考えても14あるんです。この各議員が1人1課ずつ担当したって、要は全部、要は14人よりも下がっていけば兼任していかないかん。要は何が言いたいかというと、戸上さんも理由にされていまして、議員の側ばかりが下がって行って行政機構が変わらなかつたら、もしかしたら、この今シビアに物事を運用しなくちゃいけない状況下が、見落としが出てくるかも分からない。人間の1人が担える、担いの

キャパシティというものはある程度決まっていると思うので、あまりそれを越えてばかりおったんではエラーが出てしまう。そこはもう本当に、大きなところなんじゃないのかなと思います。

ということで、できれば、市民は恐らく今人口が減って、結構子育てに回してほしいのに回っていないとか、高齢者の方に回してほしいのに回っていないとか、いろんな意見を私聞きます。ということは、本来なら高齢者の方の意見をどなたかが聞いてきて、子育ての世代の方の意見を聞いてきてということ、できるだけ執行部に反映させるためには、やっぱりここには議員としての数の論理が必要じゃないかな、多数のチェック機能というのが必要じゃないかなと思います。

なので、ごめんなさい、ちょっと滅裂な方向へ来てしまっていますけれども、いわゆる人口減少ということ、理由にされるのであれば、恐らくは議員数は維持、逆に増加、もっとシビアな運用を市民は求めてくるはずなので、それぞれの人間は人間なので、聖人君主ではないので、やはりある程度人数でカバーする以外にはないというのが私の結論で、私の中では、この人口減少を定数削減の理由にはできないのではないのかなという結論に至っております。

すみません、滅裂で失礼いたしました。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

浜口一利委員。

○浜口一利委員 今日のテーマ4点挙がっているところなんですけれども、人口減少についていろいろ1人ずつ意見はあろうかと思いますが、定数を考えるときに、定数と議員としての考え方の中で、人口減少が大きな要因になるのかならないのかというあたりで、意見をずっと、そのような検討で行かざるを得んのかなと思うけれども、本当に人口減少とともに定数をどうしても減らしていくものが、そのくらい大きく位置を占めているのかどうかという、そのような考え方でいいのかなと思うんですけれども。いろいろ意見を言うとなると、もうこれ、これで話終わっていくよ。

○坂倉広子委員長 戸上委員。

○戸上 健委員 委員長ごめん、一利さんの意見と関連するんですけれども、今回の議会事務局から、我々が議論する上で出していただいた資料というのは、非常にいい資料がたくさん出ると思うんです。その中で、この資料4の議員1人当たりに対する人口というのが出ております。鳥羽市は、定数14の場合は1,254人に1人で、四日市は9,103人に議員1人です。これは市民にとって悪いことなのかいいことなのかという判断が、僕は求められるというふうに思うんです。僕はいいことだと思うんです。市民からすれば、1,200人に1人の議員がおるということと、9,000人に1人しかおらんという議会と、どちらが市民にとって身近な議会なのか。先ほど出とったいろんな市民の要望・意見、それを市政へ反映してくれる機会というのは、どちらの議会のほうがより密度が高いのかということ、僕は一つ判断材料にすべきやないかというふうに思うんです。

僕、一番最初の議論のときに、意見陳述のときに、粒ぞろいの14人であれば、14人おってほしいという元課長の話を紹介しましたがけれども、私は、市民は、本当に市民のところへいつも来てくれる議員が14人そろってくれと、がん首並べとってくれと、そのほうが市民にとってはありがたいと。これ、9,000人に1人であれば、2人ということなんです。鳥羽で人口1万7,000に2人しかおらんと。四日市並みでい

んですかということになるわけさ。四日市のこれがいいとすればですよ。僕はあかんというふうに思うんです。鳥羽のほうが、格段にシステムとしては優れとると。要はそれをどう発揮するかと、それが議会と議員に迫られとるわけですわ。そういう発揮する議会にしよう、次からしよう。それをオール鳥羽市議会で、木下議長と浜口議長がこの8年間努力してきたことじゃなかったんでしょうかと僕は思うんです。

○坂倉広子委員長 浜口一利委員。

○浜口一利委員 私もずっと同じようなことばかり言うけれども、人口減少によって定数を少なくするのが議会としてもいいのかどうか、市民としてもいいのかどうか。市民としてもいいのかどうかというのは、今の戸上委員のほうから言われたとおりかと思う。鳥羽市みたいに1,200人より9,000のどっちがええかといえば、当然議員としての役割、一人ずつ果たすことができれば、当然そのほうがいいわけなんで、市民にとってもいいわけなんで。そのような考え方で、一つずつチェックしていかなあかんのかなと思いますけれども。

ただ、市民アンケートの中でいろいろ市民の声があるもんでさ、減というような考え方につながるような意見も出ていたと思うんで、それが果たしていいのかどうかということでもいいと思うんですけれども。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

濱口正久委員。

○濱口正久委員 僕、自分の中に人口減も入れさせていただいたんです。その市民の当然意見と、あとアンケートも見させていただいた中で、人口減が、先ほど財政規模の話がされていたと思うんです。ほんで、財政的には多分規模的には変わっていないんですけども、市民の中には、これ財政規模が変わっていないというふうには思っていないくて、すごく縮小しているように、市民に負担が増えているように映っていて、人口も減っている中で、多分議会とかそういうものに対して、自分たちも痛みを伴っているんで、感情的にですよ、多分縮小、減らさへんのかというのが多分あるかと思うんです。

ただ、自分の中で人口減少をしている中の、それに対する否定的、それは関係ないという明確な答えを持っていないんです。それが自分の中ですごくジレンマというふうに感じているところがあって、本当に適正規模な人数というのはどれぐらいあったらいいのか、果たしてその14人が維持できれば議会力も維持できんのかとか、いろんなことを考える中で、全然、ただまあ市民とかいろんなことを考えると、やっぱりそうすべきなのかなというふうなものなんです。

だから、減らしたほうがええとは当然思っていないんですけども、減らさざるを得ない状況に来ているのかなと感じて、僕はその辺が妥当なんではないかというふうに思っているぐらいです。だから、皆さんがそれを覆すような、いろんな討論の中で意見がどんどん出てくればかなとは思いますが、すみません。

すみません、明確な答えが全然分からないんです。本当正直、何が、どれぐらいがええのかという。ただ、本当に少なくなると、本当人数だけでもよくないというのは分かっているんですけども、どこら辺なのかというのが、ちょっと分からないですね。すみません。

(「基準がないんでね。そこが一番あれやと思いますけれども」「人口減少と定数削減というのは、直接結びつけるものではないというような考え方もあると思うんやけど」「でも、過去減ってきたというのがあって、人口と」の声あり)

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

このテーマについては、皆さんの意見を賜ったと思いますので、次のテーマに。どうですか。

(「でも、ある程度、もうまとめとかんとあかんの違うんですか」の声あり)

○坂倉広子委員長 山本副委員長。

○山本哲也委員 すみません、今回僕、このテーマを挙げて議論をしてもらうことというのは、狙いはどこなのかというと、やっぱりみんなで共有して、この答えを出したときに、じゃ多分いろいろ言われると思うんですよ。人口も減つとんの何でやとか。例えば現状維持した場合でも、減つとるで、何でどうやって考えてなんやというときに、皆が同じ答えを出せやんとあかんのかなと思つとるんで、ある程度考えとして、どこを、じゃ減少はさせただけ人口減少とは関係ないよということも言えやなあかんと思いますし、いやいや、やっぱり人口減少しとるから議会としてもその判断で減らしましたと言えたりとか、ここに対する理由を皆共有せんとあかんと思つとるんで、ある程度議論してもうて、まとめるところはまとめやんとあかんのかなと思つています。皆さん共通の認識を持ってもらうということが大事なことなんかなと思つとるんで、今の考えを、とりあえずまとめるというか、こういう感じでもよしいかぐらいのところまでは持っていかなあかんのかなとは思つとるんですけども。

今出るとる意見としては、直接の原因にはせんほうがいいんじゃないかというのが多い意見なんです。僕聞かせてもらった、濱口委員にも聞こうかなと思つたんですけども、大事なんは、その減少を理由の一番に書いている方が、その理由として納得できるかどうかということなんですよね。じゃないと、直接関係ないと思つていますと判断したときに、片岡さんにしろ、中世古さんにしろ、第一の理由としては人口減少を挙げとるわけなんです。となると、減らさなあかんやないかと言つとる第一の理由を否定されることになるんで、じゃ考え方にお変わりはありませんかともなりますし、そこを納得した上で次の話をしていかなあかんのかなとは思つとるんで、濱口正久委員は、正直挙げていますけれどもという話は今してもらったかなと思つとるんで、そこを、この理由として減少を書いとる人らが、今のこの話の流れを聞いてどう感じとるかということが僕大事なかなとは思つとるんで、その辺をちょっと話ししてもらわんと、じゃ次行きましようかとは、なかなかいけへんのかなと思つとるんですけどもね。

○坂倉広子委員長 皆様にはご意見を賜りたいというのがこちらの希望でありますので、ぜひこのときに、まとめあげることもつながってまいりますので、よろしく願いいたします。

河村副議長。

○河村 孝委員 副委員長のおっしゃるとおり、正直に言っていただいたほうがいいのかないかなというのと、特に2名以上減とされている方は、もう現状維持だということでの討論というのは、はっきりもう戸上委員と一利委員に出してもらっているわけですよ。逆にそれは、2名減以上を主張される方というのは、何でそうなんだということは、それに対して問いかけを投げられているわけですから、しっかりそれを答える義務が私はあると思います。

私は、今回で2名減は、もう絶対に反対です。なので、この討論の中で、いや、戸上さんの話を聞いたら、最初そうやってアンケートで書いたけれども、やっぱり減らさんほうがええのかな。さっき河村委員の主張を聞いて、ああ、なるほどな、ほんなやったらやっぱり1にしようかというふうに、変わられたんなら変わられたということもはっきり言ってもらえればいいと思つとるし、副委員長おっしゃるように黙られているのが一番困

るのかなと思うんで、今度は皆さんその辺を踏まえて、もう少し議論を深めていただければなというふうに思うんですけども。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

いかがでしょうか。

南川委員、いかがですか。

○南川則之委員 振っていただいたので。

私は、考え方として、人口減というところも一つの要素やということで挙げさせてもらいました。それは、前回の定数減にしたときから10年以上たつとるという中で、4,421人が減ってきてとるところで、人口減少だけじゃなくて、河村副議長が言われたように財政的な問題というんですか。市民感情的に言うと、いろんなものを削減というか、今までやってきた、できてきたことが次から次に削減されて、予算計上がなされていないことがすごく多くなってきて、それに対して、私も議会の中で何でやというところも踏まえていろんな質問もさせてもらつとるんですけども、それが、そしたらやめとこかというところじゃなくて、市民はどんどん削減しとると。自分らの思いになっていないというところがあって、そういうところ等を含めて、それやったら議員の定数はどうなんやというところも言われています。

現状維持やというのは、もうあかんよということで、私は削減ということです。いろんな意見を聞きながらさせてもらったところですけども、市民も、言うたらそういう痛みを分かち合つとるというか、市民はもっとしてくれと、鳥羽に住んどる限りはもっとしてくれというところがあると思うんですけども、それでも現実はどうなっていないというところがあります。

それと、この前のいろんな意見を聞いたところも、議会が何もしていないというよりも、執行部がいろいろやってくれていないと。それぞれの市町のためにやってくれていないというところがあって、それは何でやと言うと、お金がないというか、財政的な問題があると思うんですけども、そういったところ、戸上委員が質問者数というのも言ってくれましたけれども、もっともっとやっばり市民のために声を上げて今後はやっていかな、さらに4年後、5年後というんですか、4年後、8年後と、ますますそういった人口を捉えるだけではなくて、市民の声というのが強くなってくような気がするというところなんです。そういうところを含めて、この減ということで私はさせていただいたところです。

○坂倉広子委員長 河村副議長。

○河村 孝委員 南川委員おっしゃっていただいたように、多分トータルで考えてみえる方もみえるんで、もうここからの議論は、戸上委員から人口減少と議員定数の関係についての見解を、現状維持派としてQアンドAでAもらったんで、もう少し範囲を広げて、もうその後の他市町との比較、市民アンケート、議会力も含めて、これトータル的に意見を持ってみえる方もみえるかなと思うんで、なるだけ戸上委員が問いかけた人口減少と定数の関係については、それぞれの意見を述べてもらおうとして、その後のテーマについても総合的に触れたいとおっしゃる方がいるのであれば、触れてもらって話ししてもらったほうが、より議論が深まるのではないのかなというふうに思いますけれども。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

テーマとして、人口減少で皆様にお答えをお聞きしていたところなんですが、先ほど河村副議長が言われた

ように、他市町との比較も含めてご意見があるようであれば……

(「市民アンケートも議会力も」の声あり)

○坂倉広子委員長 はい、全部ひっくるめて、4つのテーマということですので、市民アンケート、議会力というのを含めた話を深めてまいりたいということをお願いしていただきましたが、いかがでしょうか。それで進めさせていただきたいと思いますが、よろしいですか。

(「はい」の声あり)

○坂倉広子委員長 それでは、どうぞご意見を賜りたいと思います。よろしく願いいたします。

瀬崎委員、どうぞ。

○瀬崎伸一委員 すみません、4つ挙げていただいているテーマ全てについて、私自分の意見を。参考にさせていただくというか、土台にしてもらうために、わざと申し述べさせていただきます。

まず、他市町との比較というところをテーマにさせていただいておりますけれども、ここに関しては、恐らくやっている人間が違う。財政規模、人口がよく似ているとはいえ、土地の場所も違えばやる人間も違うということで、恐らく参考情報程度にしかないというのが自分の中での結論です。市民とかいろんなところに対する説明する理由として、よく似た規模のところと同じぐらいの人数にしているという理由として使いやすいのは事実だとは思いますが、果たして、じゃそれが本当に鳥羽市議会において、熊野と一緒に12というのが正しいのかと言われたら、熊野の事情と鳥羽の事情というのは全然違うと思うので、あまり本当の意味での理由ではないんじゃないのかというのが自分の中での考えです。

市民の声、ごめんなさい、後にしてください。

議会力というところは、少数精鋭というところは、機動力がアップするというメリットがあるのかなど。もし、削減理由として議会力が上がるんだという理由にした場合、人数が少なくなれば折衝するのもやりやすくなってというのは、機動力は上がるんじゃないのかなとは考えられますけれども、普通に考えて、やはり行政のやるべき担いというのが何も変わらない中で人数が減るということは、やっぱり議会力は絶対に下がる方向だよというのが自分の中での思いです。

いわゆる、選挙という不確定要素を我々はやっぱり念頭に置いておかななくてはいけないということで、議会にとって有益な人間が選挙に強いとは限らない。ここはすごく大きなところだと思うんです。議会にとって有益、かつ市民にとっても有能な議員が選挙に強いということが、一番求められているのかも分かりませんが、実際のところ、そうとも限らない。私も含めてでということかなと思うので、やはり定数削減は、こうすれば議会力はやはり下がってってしまうんじゃないのかなというのが私の考えです。

私の自分の削減理由の一番の芯というところは、やっぱり市民の声です。世の中の中で今現在いろんなことで、先ほど南川さんがおっしゃっていたのもそうだと思います。自分たちの受けてきたサービスは減らされている、自分たちが今までできてきたことはやるな、やれないと言われている中で、何で議員だけは同じ、今まで現状どおりで行くんやって。そういった、いわゆる市民感情というところは、無視できないのではないのかな。市民アンケートを見ても、すごく心の痛いというか、肩に重責の乗るようなご意見もいただいていますし、ここだけは我々にもし利があって、現状維持する正当な理由というものを用意できたとしても、今それを主張すべき状況下にはないと判断するのが、議会・議員の役目かなというのが理由です。市民の声を、やはり上

位と比較をさせていただいて、幾分とも上位であるというふうにして、私は1名から2名、自分の中では役職が13ある中で、14人なら1名減で13でぎりぎり分、14、12になってしまったら、どなたかは兼任をしなくてはいけない。そのあたりがぎりぎりのラインだなという考えです。河村委員がおっしゃった、年を追ってという考え方を自分の中でようしませんでしたもので、一旦そのような答えで書いてあります。

というところで、土台になったですかね。すみません。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

河村副議長。

○河村 孝委員 委員長、副委員長というのは、この委員会のファシリテーションを務めていただいているので、なかなか自分の意見を最初に主張するという、その議論の進め方ができないと思うんですよ。議長におかれましても、もし定数削減ということであると、議員発議で議題が上がってきますんで、なかなか議長の意見もこの場では述べられないという。それ以外の方々の意見を私は聞きたいと思うし、その辺の議論がもう少し深まるように、皆さんご議論いただければなというふうに思うんですけども。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

奥村委員、どうぞ。お願いします。

○奥村 敦委員 前回、議員定数に関する発表の内容と今とは、私ちょっと考え方は変わっていません。やはり皆さん、瀬崎委員もおっしゃったようなのとほとんど同じなんですけれども、監視機能、議会力の点から言えば当然現状維持、やっぱりそうであると個人的には考えております。

しかしながら、やはり今回、市民アンケート、LINEアンケートと、今回公聴会に来ていただいた人の意見を踏まえまして、やはり前回もあれでしたが、2名減がウエイトが大きいということと、4名減もウエイトが大きかったというところのアンケートありきの回答になるか分かりませんが、そこはやっぱり尊重すべきではないのかなというところで、2、4のどちらかを選択する形で2名を選択したというのが、私今回のあれなんですけれども。

あとは、人口減少とか他市町との比較というのは、数字でなかなかこういうものを表せるべきではないと僕は思っていますので、僕の念頭には置いてございません。

こんなところで、以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

世古委員、どうぞ。

○世古安秀委員 アンケートの結果については、非常に私たち、議員としての私としてもショッキングなアンケート結果が出たというふうに思います。ということは、議員に対してのやっぱりいろんな批判というか、もっとこうしてほしい、ああしてほしいというふうな声があるけれども、なかなかそういうふうになっていないというのが現状ではないかな。

ただし、戸上委員も言われたように、まだまだ議会の活動とか議員の活動、質問とかというのが、広報のほうでは、議会だよりのほうでは一般質問は出ますけれども、なかなか委員会での質問とか質疑というのは、表面になかなか出てこないというふうなところもありますので、その辺をいかに今後議会として市民に発信をしていくかということが大事であるかなというふうに思っております。

それで定数、私は現状のままではいけないので、市民の苦しい心情を考えると、今回は1名減にしたほうがいいのではないかとということで、発表を先般させていただきました。それは変わっておりませんが、やっぱり市民の、市民感情というのも酌み入れた中で考えることが大事ではないかなというふうに思って、1名減と。積極的なというよりも、そうせざるを得ないなというような状況ではないのかなというふうに、現在のところそう思っています。

以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

どうでしょうか。

(「今、結構市民の声を大事にしたいという方が多かった。戸上さん、この間、市民の声に関してはご意見されとったんで、一回聞いてみてもいいかなと思いますけれども」の声あり)

○坂倉広子委員長 それでは、戸上委員。

○戸上 健委員 市民の声を大事にするというのは、議員のこれは原理原則で、これは当然だというふうに思います。国の政治家が、あるとき「民の声も、変な声たまにあるもんだな」ということを言うたことがありますけれども、僕もほとんど、いろいろ出ると市民のほうから言われます。もう定数削減オンパレードです。それでいいんですかということはいえますけれども、それも同僚議員の皆さんと全く同じです。アンケートでも全く同じです。

しかし、僕が言いたいのは、前回も言いましたけれども、そういう議会と議員を選んだのは有権者のあなた方でしょう。これにも、アンケートにも、質問もしない、市民との対話もない、給与をもらうだけの市会議員は不要だと思います。市会議員として資質に欠ける議員を除くと10人以下だと思います。だから減らせて言うんですよ。そういう議員を、あなた方は選挙で選んだんと違うんですかと、僕は逆に言いたいというふうに思うんです。いろいろ市民の声は出ておりますけれども、議員の今のこの状況も、私は鳥羽市民の民度のほうを、率直に正比例に反映しとるというふうに思います。

それで、19人いたときの議会と対比しましたけれども、あるとき、今のベテラン議員の皆さんも新人で出られたときです。本当に活発でした。ですから、議員数を減らせば、それだけ少数精鋭になるよというのは間違いです。仮に10人になったとしても、その中に市民が選ぶ、市民の今の民度で選ぶんだから、少数精鋭になるかという、僕はそういうふうに断定はできないというふうに思うんです。

それで、ですもんで、もう一つ、議会側の反省としたら、先ほども出ておりましたけれども、こっぴどこの今期、前期と、一利さんの4年前と、これから今の木下議長のこの3年間と、広報広聴委員会を中心に、山本副委員長を中心に、本当に市民に向けてミライトークをはじめ、いろんなアクションを僕はやってきたと思うんです。これほど市民に開かれた議会というのは、正副議長の記者会見もそうだけれども、僕がかつてないというふうに思うんですよ。それを、まだ議会の発信力が弱いと言われてれば、そうかも分らんけれども、市民の側も、有権者の側も、議会は今どういう活動をしとんねやということで、積極的・能動的に議会にもっと関心を持ってほしいと。関心を持ってもらえれば、議会の奮闘努力というのは、ある程度僕は理解してもらえらんじゃないかというふうに思います。

ですから、議会に対して全く無関心、そして議員についてもあまり接触もしないと、そういう市民の皆さんが今回のアンケートで、こういう議会批判というか、それをしているくらいも僕はあるというふうに、率直に思います。ですから、この市民アンケートと市民世論が議会数を削減せいと言うとるから、議会としてはやっぱりそれが大前提になるんやないかという議論は、僕は議会としては愚策だというふうに思います。そういうことです。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

濱口正久委員。

○濱口正久委員 今、戸上委員から市民の声の話もあったんですけども、逆に今までいろいろミライトークとかして市民の声を聞くというふうになって、だんだん聞いてきたと思うんですよ、市民の声を反映するとか。その中でこんだけの市民の、じゃそれに対して、その市民アンケートとか市民の声に対して、そこは飲まへんのかというのが、どう答えていくんかというのは、非常に僕の中でも悩ましいところです。これ、本当に12人以下にしようというアンケートで行くと、80%という物すごい数で、このアンケートを出した人というのは、本当に物申したい興味のある人なんじゃないかなというふうに私は理解してというのと、あとはその中で出てきたのは、やっぱり当然この中を参考にさせていただくと、人口減少だったり、人口とか、あと尾鷲市とかいろんなところが、このテキストマイニングのそのワードで出てくるそのスコアのところが、非常に高いところで比較されてくるのは、当然あると思うんです。

ただ、それはあくまでも僕も参考の中で、その2を減らすという総合的な話をさせていただくと、議会力の維持もさることながら、本当に今後の、将来の鳥羽市のことを、人口が減ってきた中で、人口バランスもあると思うんです。若い人たちが本当に議会に出やすいような仕組みのほうが、僕は本当にええと思って、そのためにはやっぱり、ここには出てこなかったですけども、議員の報酬、将来的にももしサラリーマンをやっていたら、将来の年金とか補償も全て捨てて将来の年金もないようなところに、じゃ若い人たちが来やすいのかってなってくると、ちょっと難しいのではないかなというふうに思っています。それなりの、ある程度の歳費を、報酬を上げるべきかなと思っていまして。

ほんで、2を減らせという中で、そのうちの1人分に当たる議員報酬、大体月額2万ぐらいプラスすれば1人分が出るのではないかなという計算の中で、私は2減らして1名分をそこに充てると、このまま、ただ減らして、1減らしてそこを増やすってなると、ちょっと難しいのかなというふうに私は考えて、何も変わらないのやないかと言われると、本来はそうかも分かんないですけども、私の2名減の理由の中にはそういう理由が、個人的にはそういう理由が含まれています。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

片岡委員、どうぞ。

○片岡直博委員 市民アンケートの件なんですけれども、少なくとも民意、民意やと思います。だから、軽視はできないと思います。市民アンケートが絶対とは言いませんけれども、軽視はできないと思います。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

山本副委員長。

○山本哲也委員 僕も市民アンケートについては軽く捉えることはできないなというところではありまして、直接

的な理由にはしていませんけれども、頭には入れとくべきなところかなというふうに思っています。戸上さんがおっしゃることも重々分かりますし、そう言いたいのはやまやまなんですけれども、それでもやっぱり先をどちらに向けるかという、やっぱりそれも議会に向けていかなあかんのかなと思っているんですね。それをできてこなかった議会議員の責任なんじゃないかなというところもありますんで、これも今回だけじゃなくて、毎回そうやと思うんです。ずっとその課題を何十年も引きずってきて、いつまでたっても市議会に対して関心を持ってもらえないというのは、ここ数年だけの話じゃなくて、ずっと持つとる課題なのかなというふうに。それを解決できなかった今回の我々の責任でもあるのかなとも思いますし、どこが問題なのかというところは、また別のところにあたりもするのかなとも思いますけれども、それを、だからと言って、市民のアンケートは軽くというわけじゃないと思いますけれども、あまり参考にせんでもいいんじゃないかというところにはつながっていかへんのかなというふうには思っていますんで、その辺はそのように思います。

あと、議会力の話も出ていましたんで、僕の議会力に対する考え方なんですけれども、これも議会力というのも、僕この定数で考えやんでもいいのかなというふうには思っています。二元代表制ということで、例えばですけども、執行部側を100、議会側も100という数字を置けば、その100をどう埋めるかというところやと思うんですよね。それを今14人で埋めに行くとするような状況で、100割る14なんで7.幾つになるのかな。ほいで、1人当たり大体7のパワーを持って臨めば100が埋められるんですけども、僕書かせてもらったんですけども、現状1人、その数字にやっぱり凸凹があって、今現状、僕の感覚で言うと、14人でその100を埋めとる感じじゃないんじゃないかというところなんです。なので、10人に削ったとしても、その100は今のあれやったら埋められるんじゃないかと。仕組みや議会としての機能、今のやり方とかであれば、10人になってもその100は埋められるんじゃないかというところで、下げたとしても、その100は保てるというイメージですね。なので、下げたところで議会力は低下しないというところで、今回2つ削減してもいいんじゃないかというところでも出させてもらっています。

議会力を、僕は単にその定数だけで決めてしまうというのは、すごく危険なところであるんじゃないかなと思っていまして。なので、選ばれる人間が1人、今度12、例えば2減にしたとしても、100割る12なんで8.幾つに今度なるのかな。9の力を持って全員がすれば、議会力は上がるわけなんですよね。ほいで、選ばれる人間と、その辺の部分で差は出てくるかなというふうには思いますけれども、逆もしかりですよ。次が5しか持っていなかったら60しかなくなってしまうんで、それはもう、議会力の低下にはなるかもしれませんけれども、今の委員会を一本化したりとか、そういったいろいろミライトークなりの仕組みもいろいろつくってきまして、その辺を駆使していけば、何とか議会力は保てるんじゃないかというところで、減らしても大丈夫というところで、私は今の鳥羽市議会をそのように、定数を減らすから議会力が減るというふうには評価をしていないというところでさせてもらいました。なので、議会力に関しては、そういう考え方もいいんじゃないかなというふうには思います。

基本的に、市民の方がおっしゃるように、役に立たんのが多いで減らせと言ってくると、役に立たんのに減らすと、なおさら議会力は低下していくわけですから、本来、役に立たんからもっと増やして、窓口広げてどンドン議会に議員を送り込めと言ってくるのが、本来の役に立たん人が多いときの言い方になるのかなとは思いますが、現状そうじゃないというところはあって、なかなか難しいかなと思うんですけども、僕

としては今の考え方、その逆で、今これだけでできているんだから、14人から10人に減らしてもできるんじゃないかというところで、最小限の金額で最大のということですか、この間やって、勉強しましたよね。監査の研修で、この間ちょっと習ってきたんですけども、その辺を意識する必要があるということやと思いますんで、僕は10人に減らしても、今の機能は保ててできるんじゃないかという判断でさせてもらいました。

他市町とは、僕はあまり、皆さんおっしゃったように、そこまで意識しなくてもいいかなというふうにも思っています。あくまでも他市町は他市町で、今鳥羽市議会の機能とあれをもってすれば、どんだけの数で対執行部、二元代表制の役割が果たせるかというところを考えたところの結果として、2減でいいんじゃないかというところなので、あまり他市町はそこまで、参考にすればいいかなとは思っているのであれですけども、他市町が10人でできとんのに、何で鳥羽市が14でできひんとなったときの言い訳というのは、ちゃんと考えなあかんかなとは思いますが、鳥羽市としてはこんだけ、鳥羽市議会としては、どういう機能を持ってこういう仕組みでできていますというふうなことができれば、その辺はあまりいいのかなと思いますんで、他市町はあまり今回の理由にはせんでもいいかなというふうに思いますね。そんな感じです。

○坂倉広子委員長 河村副議長。

○河村 孝委員 他市町との比較も、市民アンケートの中に結構、熊野がこうしている、尾鷲がこうしているというところがあったと思うんですよ、アンサーがね。私は、市民アンケートと他市町との比較というのは同じかなというところで、ひっくり返して考えさせてもらったんですけども、片岡委員がおっしゃるように、されど市民の意見というのは大事だと。全くそのとおりだと思います。ここで議論していただいていることは、誰が間違っている、誰が正しいということはないと思うんですよ。みんなが、じゃ両極で100、ゼロで考えているのかと思ったら、こういった議論というのは、ぎりぎりのところで49対51だったり、本当にもう泣く泣くというところで、ここに見える議員が誰一人として民意を無視していいとは思っていないわけだと思うんですよ。だから、そのバランスの取り方だと思うんですよ。片岡委員は民意を大きく捉えていると思いますし、戸上委員おっしゃるように、民意は大事というのは議員の基本であるけれども、そればかりではないところは今回大きいのではないのかなというところで、みんな100、ゼロの話ではないと思うんで、どれが正しい、どれが間違っているという話でもないというのが私の感想です。

正久委員おっしゃった、2人減の理由の片方は、2つ議員を減らして、その1減の部分の子育てというところの話があったと思うんですけども……

(「議員報酬」の声あり)

○河村 孝委員 ああ、議員報酬。若者が参加しやすいようにと。

ちょっと話は逸れてしまうのかも分からないんですけども、今こうやって、どこを、じゃ若い力ということかというところが、その定義がそれぞれによって難しいとは思いますが。私は、今のこの議会のメンバーというのは、そういう意味ではバランスの取れている議会のメンバーではないのかなというふうに思って、もともと30代で哲也委員と私が40代で入ってきた年齢が、その前の選挙だったと思うんですけども、そこから30代、40代、50代、60代、70代、80代というところで、それぞれがみんな経験を積みながら持ち上がっていくと思うんですけども、それももう山本委員も40代になり、私も今度は50代になっていくわけですよね。そうやって経験を積んでしていく。その経験をなされた先輩方がいて、新たに若い、正久委員や

瀬崎委員がまた入っていただいて、役所の経験をしている南川委員が入ってもらってというところで、新人の3人さんが入ってもらったと思うんですよ。決して、だから今の議員のメンバー構成が、私は悪いというふうには思っていないわけです。

よく市民アンケートなんかでも書かれていましたけれども、選挙においての地縁血縁は駄目だというふうに市民アンケートで書かれていましたけれども、私はそうは思わなくて、田舎なら当然、選挙において地縁血縁ってあってしかるべきというか、あるんですよ、それは実際にあると思います。それも、だから民意なんですよ。だから、そうやってして、鳥羽市というのは構成されているわけですよ。だから、それも受け止めなければならぬと思うと、私はそこも仕方ないと。それが民意なんですから。だから、決して地縁血縁で選挙を選んでというところが、私は悪いわけではない。ただ、今の若い世代、じゃ20代、30代、それ以下の年代の人が次を選ぶというときには、もう少し鳥羽の未来について語りたよねという希望があったほうが良いというところで、なるだけ地縁血縁じゃない選び方をしましょうと。市議会議員も、そういう鳥羽市全体のことを考えながら未来のことを語りましょうと、公約を出しましょうというところが、徐々にではあるけれども、私は浸透してきているのではないのかなと。

当然、市議会には、審査はできますけれども決定はできないわけで、財政の執行権は執行部側にあるわけですから、市長みたいに、こういうふうにお金を使いたいというところは、公約としては市議会議員としては上げられないわけですよ。こういうふうに使ったほうが将来のためにはいいでしょうということとは言えるけれども、決定権はないわけです。だから、その辺でも二元代表制の違いが、もう少し分かっていただけではない部分もあるのかなというところもありますし、今のこの我々の議員のメンバーを、僕は決して卑下することは何もないと思って、それよりももう少し未来志向で、次こういうふうにしていったほうがもっとよくなるのではないのかというところの議論が深められればなというふうに思います。

ちょっとそれてしまいました、すみません、委員長。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

皆さんの熱い思いを語っていただいたんですが、ちょっと時間が、1時間経過しましたので、休憩を取りたいと思いますので。5分でもよろしいでしょうか。2時55分で始めさせていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

(午後 2時45分 休憩)

(午後 2時55分 再開)

○坂倉広子委員長 休憩前に引き続き会議を再開いたします。

皆様にはいろいろテーマをご議論していただいたところでございますが、まだ思いを伝えたいということがありましたら、どうぞご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。いいですか。

浜口一利委員、どうぞ。

○浜口一利委員 私もこれまでいろいろ言ったんですけども、一番大事なところは、人口減少を即定数削減につなげていいものかどうかというところ。そして、他市町との比較というところも、鳥羽市と尾鷲市さんが10人ということで、いろいろ言われとるけれども、鳥羽市とは全く違うところなんで、尾鷲が10人にした

から鳥羽市も少なく10人にしろというような声を、そのまま直接ということも、これもちょっと考えるべきなところだと思うし、市民アンケートについても、いろいろ市民の声をということで、全てに対して反論もしたくありませんけれども、尊重はしなければいけないけれども、市民の声というのを即定数減につなげていいものかどうか。やっぱりこのあたりで踏みとどまって考えなければならぬかと思えますし、議会力と言っても、議会が一生懸命やってきた中というのも全く知らないというような、知りたくないというような感じの声もあるわけなんですけれども、それは議会としてのこれまでの努力の至らなさということもあろうかと思えますけれども、そのあたりも踏まえていろいろ考えた中で定数というのを考えるべきだと、そのように思います。

考え方は、私は変わりません。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

皆様の議論をいただいた中で意見が変わったという方がいらっしゃったら、どうぞご発言いただきたいと思えます。

(「一回、議長にお気づきの点とか何かお聞きしてもうて」の声あり)

○坂倉広子委員長 そうですね。

すみません、議長。皆さんからご意見をいただいたんですけれども、もしよければ、ご発言をいただきたいと思えますが。

(「今の議論の中で、お気づきの点とかがあれば」の声あり)

○木下順一議長 気づいた点は、定数で、皆それぞれの委員さんに関わってくる方も、次期のことを見据えればあるんかと思うんで、先ほどから積極的に発言される委員さんが数名であって、その人らの意見だけを言うとして、何かこう、お互いに戦うとかいうか、そんな激しくはなかってええんですけれども、あの人はあややとるけれども私はこう思うとか言うて、もう少し討論になればいいかなというような感想は受けています。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

山本副委員長。

○山本哲也委員 議長、ありがとうございました。討論がもっとあってもいいんじゃないかというところやとは思えます。ちょっとこう、進行のところで、あっちこっち行ったりとかしながらしとるところで、ちょっと難しいところもあったのかなというところは反省しておりますけれども。

それぞれ皆さん、ある程度いろいろ意見を言っていた中で、その考え方とかに対する質問とかもあってもいいのかなというふうにも思うんです。もったこう、先ほども言わせてもうたんですけれども、ある程度この委員会で理由とか、その根拠をしっかりと持つためには、それぞれのところについてしっかりと議論がなされるべきなんじゃないかなというふうにも思っていますんで、河村副議長も言っていただきましたけれども、考え方に間違いとかというのは多分ないというのは、この間のミライトークでもそうですけれども、やと思うんで、それぞれ皆さんがしっかりと考えられることを、また市民の皆さんからお預かりしているようなことがあれば、どんどんと発言いただきたいなというふうに思えます。

どうでしょうかという、なかなか手を挙げにくいところやとは思いますが、今……じゃ、はい。

○坂倉広子委員長 南川委員、どうぞ。

○南川則之委員 私の、前段で人口減の話はさせてもらって、定数減になる考え方の中で、1から2名にしたと

いう考え方で、山本委員が2名を3名のというのは、委員会のいろんな中で委員長の負担というのがなってくるということで、これは尾鷲市議会が10名にしたことによって、委員会、委員長以下8名で4対4になることが多かってということで、新人議員が4人おって、ベテラン議員というか、こう若い人との考え方というか違いがあつて議案が精査されていくということで、委員長の負担が高いんやという話をされとつたということで、1名にしたらどうかなという考え方はそこなんです。13名ですと、11名で全ての議案を審議せないかんということになって、最悪6対5になるということで、山本委員が言われた5対5になるというのは、11名の場合は9人で4対5となると思うんですけども。

そこまでちょっとどうかなと思うのは、次回どういう議員さんが出られてというところがあつて、どんな議員さんの構成になるか分かりませんが、いろんな議会の中を考えると、そういったベテランというか、議案というか、いろんな議案に対して精通しるところというのは、もっと考えていかなあかんところもあるし、さっきから言う市民の感情とか思いがあつて、こうしてくれというところがあつて、私もいろいろ予算の反対するところはあるんですけども、各論反対で総論賛成という議員さんがほとんどやと思うんですね。聞いた中で、ここは絶対反対してくれと言いながらも、いやいや、全体のことを考えると、市の運営上、賛成せないかんというところがあつて、賛成されとる人もおると思うんですけども、議会力からいうと、前に高沖さんの勉強会の中でも、最悪今後は予算でも修正予算も出しながら、議員さんらが市民の声を聞いて、しっかりと声を反映できるような形でやっていくべきやという意見もあつたと思うんですけども、なかなかそこまで行きつかなんかなと現状は思いますけれども、将来的にはそうなっていくべきやと思うんです。

そんな中で、今言ったように委員長の負担を考えて、13名で11人の6対5、議案に反対でも6名、賛成でも6名というところが、本当の審議した中身やと思うんですね。そういった形で、市民はそういった議会の中身というのは、ほとんど分かっていないというか、分からんで当然やと思うんですね。そんな中で私に託されたというところがあるもんで、私自身も新人の2人の議員さんもそうやと思うんですけども、毎回毎回発言をしながら、怒られながら、自分で考えをまとめながら、ああ、今度はこうしようということでやってきた3年間やと思うんですけども、さらに萎縮せずにしっかりやらないかんという気持ちで3人もやつとると思いますので、そういった中で、やっぱりそういう委員長の負担軽減というんですか、やっぱりみんなで議論し合つて議案を審議するというところがあつて、その場で委員長の判断以外に、議論した中で収められるのが1人減ということで、それが一番議会力というか、まずはそれが一番いいかなと思います。

市民の求めるところは削減しなさいというところにあるもんで、それをベースにして、そういった考えで1、2名ということで、1名あげたのはそういう理由です。

以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

河村副議長。

○河村 孝委員 南川委員おっしゃる奇数偶数、これ紀男委員もおっしゃっていたと思うんですけども、今現在も、もうその状況にあるわけですよ。行政常任委員会にしても、予算決算でも、議長を除く13人ですね、今。委員長は基本的に表決に加わらないということで、12なんですよ。だから、今その現象が起こらないだけで、6対6で委員長が最終的に判断しなきゃならないというのは、もう今の議員構成のメンバーでもあり得

るわけなんです。

そこを、じゃ、1減になると、今度はそれが委員長じゃなくて、議長の負担が重くなるということにはなると思うんですけども、それは私もそうですし、副議長に立候補するときに、今の議長も当然それは覚悟を持ってその議長職に就かれていますし、委員長を引き受けていただいているそれぞれの議員も、それぞれは委員長職を引き受けるということは、そういうことであるという覚悟があつて引き受けていただいていると思うんで、私はあまり偶数奇数の定数は関係ないというか、私の中ではちょっと基準が低いのかなというのが1点と、南川委員おっしゃった予算案での、もっと喧々囂々の議論をして修正の動議をとというようなところがあつたと思うんですけども、議員がそれぞれ思っているところって、こつちを削ってこつちを上げてくれという議論がほとんどだと思うんですよ。だから、ここを増やしてほしい、ここを増やしてほしいのほうがいい、それぞれ市民から意見を頂戴して、それを政策に反映するということで、この予算を増やしてほしいという考え方のほうが多いと思うんです。ただ、御存じのとおり、市民にはなかなか分かってもらえないと思いますけれども、議会は増額の修正というのはできないわけですよ。減額の修正動議は出せても、増額の修正は出せない。だから、つらい。南川委員がおっしゃったように、総論は賛成できても各論がというところが、そういうところだと思うんです。議会にはその権限がないんですよ、増額しろと。だから、その委員会の中で強く言って、それを委員会で取りまとめて執行部へ申入れということを今行方形にはさせてもらっているんですけども、じゃそれが100%反映されているかといったら、そうではないと。

だから、今そのルールがある中で、法律がある中で、できることのめいはいっぱいは、今のこの議会ではやらせてもらっているのかなというふうに思います。なんで、ぜひ南川委員には、私の1名減に賛成していただければというふうに思います。よろしくお願いします。

以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

(「紀男さん、偶数やないとあかん言うてましたけれども、よろしい」「どうぞ」の声あり)

○坂倉広子委員長 山本副委員長。

○山本哲也委員 ありがとうございます。今のところ皆さんにご意見いろいろいただいたところで、人口減少のところについては、人口は減少していくけれども、それを一番の理由にはしたらいかんと違うかというところが一番、一番というか多い意見であつたのかなというふうに思います。

他市町との比較においては、様々ありましたけれども、ある程度参考にしながらというところやつたんかなというふうに思いますけれども、そこまで強くこれを押して、尾鷲10だからとか、熊野が12になったから鳥羽も合わせてという、一番の理由にはなつてこないような感じなのかなというふうに思います。

市民アンケートもたくさんご意見をいただきまして、やっぱり市民の声というのは大きいんじゃないかというところが大方のご意見やつたのかなというところと、あとちょっと議会力のところが、まだもうちょっと足りないのかなというところのイメージなんですけれども、議会力について、ちょっといろいろ皆さん、ちょっと考え出してほしいなと思うんですけども、削減することで議会力は低下するんじゃないかというところが、現状維持でされる方もしくは苦肉の策で1名減にするとかというところが多かつたのかなというふう

に思いますけれども、その辺もうちょっと皆さんの考えをいただきたいなというように思います。

いかがでしょうかと思いますけれども。それまで、その前の3つでもいいんですけども、大方さっき言ったようなところで間違いがなければ、議会力のほうでいただきたいなと思いますけれども、いかがでしょうかと思います。

ないですかね。私は下げても議会力は減らへん、下がりへんというようなことなんですけれども、いやいや、下げたら下がるやろって声もあるでしょうし、その辺をもうちょっと話しといたほうがええんじゃないかなとは思ってますけれども、どうでしょう。

○坂倉広子委員長 河村副議長。

○河村 孝委員 副委員長おっしゃるところでの、定数を減らしてもそれぞれの議員のその質を上げていくというのか、工夫によってできるという考え方だと思うんですけども、私は単純にマンパワーは多いほうが良いという考え方です。目と耳との数が多いほうが、より市民の声はすくい上げやすいというふうに思います。

ただ、それを政策立案まで持っていくというところのその機能においては、副委員長おっしゃるように、それぞれが議員の資質を上げていくと、スキルを上げていくという努力はしなきゃならないと思うんですけども、公聴力、審査力においては、目と耳の数は多いほうがよいというのが私の考え方です。

以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

山本副委員長。

○山本哲也委員 ありがとうございます。

もちろん14、数が多いのは、多いにいいのは越したことはないんですけども、理由でも僕書かせてもらったんですけども、今回のこの議会の振り返らせてもらって、じゃその14がフルで14あったかということに関しては、僕疑問符なんです。なので、市民に対して説明ができないと思うんですよ、14要るところの。今回、僕さっきも言うたんですけども、その数、執行部が100とすると議会も100あればいいところなんですけれども、やっぱり100はあったとは思ってますけれども、やっぱりそれぞれ持つとる議員さんのあれが違うかなとは思って、12でも同じことできたよねと僕は言ってしまうんですよ。そうすると、市民に対して、鳥羽市議会として14必要ですということは言えないんじゃないかということなんです。数が多いに越したことはもちろんありませんけれども、その数が14でフルで動いたら、今回100じゃなくて120とか130になっただけじゃないかなとは思いますが、そういうところであって、もちろん多いのはいいと思いますけれども、僕は今回の議会の振り返って、次の議会も14要りますということは、市民になかなか言えないんじゃないかなと思っています。

12、僕はもう12でいいと思っていますけれども、12にして、瀬崎委員も言っていましたけれども、その選挙となかなか議員さんのあれが結びつかないというのは、もちろんあるかと思うんですけども、でもやっぱりそれは、そういう制度でございまして、そこをやっぱり一番尊重せなあかんかなとは思いますが、もちろんこの作業というのは、議員定数を減らしたのがゴールじゃなくて、議員定数を減らしても、結果議会力が減らへんだよねというのが僕はゴールやと思っていますんで、その作業はその選挙という、投票とかという、市民の行動とセットでなってくると思うんで、そこは市民との共同作業でこの議会定数においては向き合わ

あかんのかなというふうに思っていますんで、そこを決めるんは議会ですけれども、結果出すのは、やっぱり市民の皆さんが投票を、選挙によって結果を出してくれるとは思っていますんで、そういうもんじゃないかなというふうなところで思っています。

なので、議会力を理由にするんやったら、じゃ12でいいよねというのが僕の結論なので、14ほしいからというのは、ちょっと議員の甘えじゃないですけれども、わがままになっちゃわへんかなというふうに思います。なので、12に減らして、次に求める、議員としても求められる仕事とかというのはこんなことがあります、こんなことがありますというところは、もっと出していかなあかんかなとも思いますし、どういうことが議員さんに求められるかというのを、しっかり議員として打ち出していかなあかんのかなとも思っていますんで、その辺は市民と一緒に、議員定数に関してはつくってべきなんじゃないかなというところなんです。

なので、市議会として14ほしいですというのは、ちょっと僕からすると今の現状、この3年間を振り返ってみると、わがままというか、議員が努力してカバーできる部分はまだあると思うんで、そのように聞こえてしまうんで、なかなか市民にこの同じだけの数をくださいというのは、なかなか言いにくいなというふうに思っています。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

濱口正久委員。

○濱口正久委員 今は議会力の話が当然出ているわけなんですけれども、その14が12に減ったときに、本当に維持できるのか、減るのかというのは、正直分からないと思うんです。誰が選ばれるかにもよるかというふうなところも当然あって、有権者の方にはそういう方を選んでほしいとしか言いようがないというのが一つだと思います。しっかりと選んでいただきたいというのが、自分も含めてね。

あと、今までのこの、僕は3年間しか知らないですけれども、3年間の中で委員会が2つあったのを行政常任委員会で1つになって、みんなで議論していこうというような雰囲気、かなり僕的にも、それまであった委員会よりも、非常にいろんな意見を聞けたりとか、皆さんの考えが聞けたり、それなりに議論ができたような機会が増えたかと思うんです。まだまだその議会に関しても、いろいろ改革の余地が、もしかしたらあるのではないかなというのと、何回か議会力の中で前から言われている、市民のサポーター制度であったりとか、きちんとしたものをカバーできる部分というのは幾らか、当然これが増えようが減ろうが、やっていたほうがええようなものというのはたくさんあるような気がしますので、そういうものも合わせて、しっかりとそこどころが、市民に対して減った理由とか、不安になるところをこういうふうなところでカバーできるとかというのを一つ見せて、今までの改革の中と、今後こういうものがやっぱり必要やというところで、市民の方にも参画していただきたいというのを打ち出したほうが、減になった場合は、そのほうがいいのかというふうに思います。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

戸上委員。

○山本哲也委員 山本副委員長にちょっとお聞きしたいんですけども、僕はこういう場でも何度も言っていますけれども、2期目で河村副議長と山本広報広聴副委員長は非常に高く評価して、もう鳥羽市議会で今かなりの敬重というか、それを担ってござるというふうに思うんですよ。次選ばれる人たちを含めて、あなた方のよ

うな議員が14人おれば、それこそ議会力というのは格段に高まるんじゃないんですか。別に12人にしなくても、議員の質というのがそろえれば、資質というのがそろえれば、僕はそれが一番いいと思うんです。12人の人よりも、14人そういうメンバーが、顔ぶれがそろったほうが、それは市民のためになるというふうに思うんです。

ほいで今回のことを受けて、アンケートの中にも不祥事の議員は名指しで随分批判されております。ですから、ここらの有権者は、僕は有権者の判断でそういう人を選んだやないかというふうに言うたけれども、今回有権者も僕は勉強したと思うんですよ。まだおろそかに、それこそ親戚やったらいいやで入れたらとかか、そういうのではもういかなんという。今の鳥羽市政というのを、本当に議会が力出してもらわなあかんというふうに有権者の判断というか認識、これも僕は高まったんじゃないかというふうに思います。

それで、今回の議員定数問題を考えるこの議会改革推進特別委員会も、広くユーチューブで流れているわけだから、誰がどういう発言をしたということも、そういう関心のある市民はちゃんと視聴して、そしてロコミでそういうのが広がるとというふうに思うんですわ。だから、私は議員数削減が議員力維持アップに比例していくというふうには思いませんけれどもいかがですかという、これが質問です。

もう一つは、議会に対する批判、議員定数を削減せい、議員報酬は高過ぎるで減らせ、これは19人いたときも同じ意見がアンケートで過半数以上占めていました。それから、16人のときも過半数以上占めていました。14人にしても過半数以上占めました。これを仮に12人にしたから、そういう声がぱたっとなくなるかという、なくなりません。同じように議員定数は多い、議員報酬は多い、減らせという市民世論というのが過半数以上あるというふうに僕は思います。そしたら、10人にし、8人にし、6人にし、4人にし、もう議会は存在しなくてもいいのかという結論に僕はなっていくというふうに思うんです。そういう議会批判をする方々は、今の執行部だけでいいじゃないかと、議会は別に本当にそんなに役割は果たしとらんと。このアンケートの結果でも、議会議員の役割を果たしているのは数えるほどやないかというような声があるわけですからね。

ですから、私はここで議論を尽くして、そして僕はもう19人おったときのほうが、より活発だというふうに思いますから、19人に逆に増やしたほうがいいというふうに思うんだけど、しかしいろんな状況から見ると、定数14人の現状維持というのが最低限だというふうに思っています。

僕もいろいろ自分なりに調べて、私の意見も書いたし、文書にもなったし、この場でも言ってきました。言ってきましたけれども、今のご意見を聞いとると、そらもう現状の2減というのは変わりませんか、だからちょっと僕も、もうむなしいうか、そういう思いも率直にあります。ですから、議長が提案・提起なさったように、戸上委員は、それはあんたそういう主張をするけれども、それは違うんとかいうか。僕はこう思うよと、僕は定数2減で変わらんと。そこで議論を尽くしてしていかなと、議会としての総意ということにはならんんじゃないかなというふうに思うんです。違うんかいな。

○坂倉広子委員長 山本副委員長。

○山本哲也委員 ありがとうございます。

もちろん、その数の部分で言えば、繰返しになるかもしれないですけども、減らさんのがやっぱり一番、その議会力という意味では、数の部分ではいいのはいいんだと思うんです。僕がずっと前回定数を考えたとき

でもそうなんですけれども、僕ずっと減らせ減らせて言うてるんですね。それは、いろいろ勉強もさせてもらって、減らすこと自体がやっぱり議会力の低下になるというのは十分理解した上でなんです。

いろんな市の事業とかも、それぞれ市の各課が自分らでチェックして、これがどこまでできたかとか、いろんなことをチェックして、じゃ次の予算、継続事業であれば、次の来年度にこんだけの予算をくださいと言いながら、こう事業を進めていくわけですよ。議会も僕はある程度それをせなあかんと思うんですよ。それをやって、僕なりにやった上でですよ、やった上で、じゃこの14人、次もくださいって言えるのかなというのが、前回から僕変わらへんところで。僕書かせてもらいましたけれども、質問もしないで発言もしない議員さんがおる中で、14必要やと僕は思えないんですよ。14人おっても、結果しゃべつとる人間とか、発言する人間、質問する人間って限られとるわけですよ。それで十分やってきたと言えるのであれば、じゃその分の数は減らしてでも十分できるんじゃないかというところがあるわけです。

なので、ある程度誰がどうなるかは分かりませんが、選挙のことなんで。そこはやっぱり市民に、さっきも言ったように託さなあかん部分があって、そこは一緒にやっぱり、じゃいかに議事を機能させる人を選ぶかというところは市民に託さなあかん部分ですけども、議会として、じゃそういうのをどうやってつくっていくかというのは我々ができる部分なので、僕はそれが今この、過去2期させてもらっていますけれども、そこを見てきて12でも同じことはできるという判断で2減とさせてもらっとるんです。

14ほしいのは、本当に14要るのは要ると思います。けれども、じゃそれを14くださいと言えだけの材料が今の鳥羽市議会にはないんじゃないかなというところで。というような部分と、12でも同じだけの機能は果たせるんじゃないかという自信もあるわけですね。鳥羽市議会のこの仕組みとか、委員会も一本化しましたし、そういうところから考えて、全部を全議員で臨んでいくという体制がつくれたというのは、僕はすごく大きいんじゃないかなというふうに思っていますし、14人で2つの委員会をやった頃より、12人で一本化の委員会を、常任委員会を1本にしてとかというふうにしたほうが、議会力で言うたらそんなに変わらん、結果として変わらんのんじゃないかなというふうに思いますし、逆に上がることもあるんじゃないかなとは思っているところです。

減らせば落ちるんじゃないかというのは、もちろん理解はしていますし、落ちる可能性ももちろんあるかなとは思っていますけれども、じゃ今期振り返って、次も市民の皆さんに14くださいとは、なかなか僕は個人的には言えないなというところです。という評価、判断をしるところでございまして。説明になっていますでしょうか。

○坂倉広子委員長 河村副議長。

○河村 孝委員 2人の名前を出していただいたんで、あれですけども、その前の議論のときに、戸上委員が途中から意見を切り替えられて、あんたらみたいな子らが来てくれるんやったら、そらもう14人おったほうがいいわというふうにおっしゃっていただいたときに、もう正直言って物すごくうれしかったです。新人で入ってきたばかりの僕らを、そうやって言っていたところというのは、もうすごく鮮明に覚えています。なんで、私も基本的に戸上委員の考え方、もう100%大賛成です。

ただし、1点だけ、今回の議員定数に対する考え方に、私はあえて書いていませんけれども、戸上さんおっしゃるように、辞職勧告決議案が全会一致で可決されるような事案が発生いたしました。議長と私で記者会見

で謝罪も、市民に向けての謝罪もさせていただきました。その後の流れを見ても、じゃ14人全員でそれが機能していたのかと言ったら、私は13も14も変わらなかったなというのが私の思いであります。

なんで、そこも含めて、私は1人減というところを主張させていただいていますし、それを市民から、市民アンケートでも、ご本人の名前を書かれてというところの、その事案に対するところの厳しいご意見たくさんあったと思います。それぞれ議員が感じていることだと思います。本当に、じゃその方が機能していたのかどうかというところがね。それも含めて、じゃ13人でも行けたんと違うんかというふうに言われたら、正直言って私はもう返す言葉がありませんというところで、1名減というところが、戸上委員の考え方に大賛成で100%賛成ですけれども、1名減は仕方ないのかなというふうに思います。

以上です。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

ほかにございませんでしょうか。

皆様にはいろいろ意見を出していただいたと、このように理解しております。それで、現状では皆様の意見はしっかりここで聞いたということになるかと思しますので、皆さんが言っていた意見はしっかりと聞かせていただき、そしてその中で、決定と言いますより、この現状を伺わせていただいた中で、議員数の削減というふうなお話が多かったのではないかと、このように思います。そして、意見を言っていた中で、意見が変わったんだというご意見はなかったように思いますので、そのことも含めて、現状では議員数の削減についての意見が多数となっていたように思われます。

今回の議論で、削減した場合の課題についての協議が進んでまいりましたが、どのような、ここまでの議論の中で、現状維持なのか削減なのかということは変わりがなかったように思いますので、そのように受け止めさせていただいてもよろしいでしょうか。

(「どないなるんですか。今後の進め方」の声あり)

○坂倉広子委員長 今後の進め方をお伺いしております。

(「何か揺らいでいる方とか」の声あり)

○坂倉広子委員長 さらに確認という形でございます。

(「ご意見変わったとか」の声あり)

○坂倉広子委員長 濱口正久委員。

○濱口正久委員 揺らぐとかじゃなくて、多分まだ腑に落ちないというか、納得されていない方とか、現状維持もいろいろ含めて出尽くしたのかなというのが、僕は分からへんのですわ。ただ、まだもう少し慎重に議論してもいいのかなというのが、どうなのかなというのがあって……

(「出てこうへんですもん」の声あり)

○濱口正久委員 出てこうへんですけれども……ですよ。もう、いきなり結論出すのかな、どうなのかなというのが。ちょっとその理由づけの中にも、例えばまだまだちょっとどうなのかなというのがあるので、いいのかなというのが、ちょっと分からないので、今後の進め方がちょっと分からないです。どうされるのかなって。予定では、まだあと2回あったんですけれども、それはどうなるのかなというのが。

○坂倉広子委員長 反対に、すみません、そこをお伺いしたいところでございます。

浜口一利委員、どうぞ。

○浜口一利委員 今後の進め方という、ちょっとずれてくるか分からんけれども、もう一点、ちょっと言い足りなかったところがあるもので。

議会力とか議会というのは、やはり一番原則的なところは、多様な分野からいろんな方が出てきてというのが原則なんで、山本副委員長言われたように、12人でもできたとかそういう考え方で行くと、また10人でもできる、そんな何かスパイラルに陥っていくような危うしさもあると思うんで。

ただ、12名で完璧にやればええけれども、今の選挙制度で100%全ての方が完全な議員というのは、なかなか難しいと私は思っていますし、これまで委員会でも、得意な分野でいろんな声を委員会で発表して意見を言ってもらえばいい、そういういろんな分野の意見を聞くのが議会・委員会だと、そのような思いの中で委員会の運営をしてきたというところなんで、なかなか副委員長の言われるようなところというのは。分かりますよ、それは当然分かる。けども、それは危ういなというのが実感です。

何か、それから、これからの進め方ということなんですけれども、私はもう一日こんな時間があってもいいと思います。

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

それでは、ご意見を賜りましたので、まだまだ討論を深める必要もあるかと思いますが、本日はここで中断をさせていただき、次回の委員会で引き続き討論を進めたいと思いますが、いかがでしょうか。

(「はい」の声あり)

○坂倉広子委員長 ありがとうございます。

それでは、本日の議論はここまでとし、引き続き次回の特別委員会で協議したいと思います。

今回、方向性をまだまだという具体的などころには、皆様の意見を賜ったわけですけれども、これから定数を何人にすべきかというところに決定するとともに、またこれまでのことを協議したいと思います。

それでは、次回議会改革推進特別委員会を6月8日水曜の本会議終了後に開催したいと思いますので、ご参集をお願いいたします。

これをもちまして、議会改革推進特別委員会を終了いたします。

ありがとうございました。

(午後 3時42分 散会)

委員長はこの会議録をつくりここに署名する。

令和4年5月23日

議会改革推進特別委員長 坂 倉 広 子